



日本植物病理学会ニュース 第40号

(2007年11月)

【学会活動状況】

1. 研究会開催報告

(1) 第4回教育プログラム

第4回教育プログラムは、北海道から沖縄県まで全国各地から集まった19名の参加者で、8月27日から8月31日の5日間、岩手大学農学部において開催された。参加者の職種としては、県の試験研究機関から7名、種苗・農業会社など民間企業から11名、大学から1名であった。

東北地域での開催は初めてで、プログラムに地域の特色を持たせるため「イネ病害の診断」(講師 生井恒雄・本蔵良三)や「野菜類軟腐病菌の分離・培養・接種」(講師 富樫二郎・菊本敏雄・木村俊夫)を加え、さらに「ウイルス・ウイロイド病の診断」(講師 磯貝雅道・佐野輝男)、「数種土壌病害の診断と病原菌の分離・同定」(講師 古屋廣光)、「菌糸融合による *Rhizoctonia* の分類と同定」(講師 生越明・古屋廣光)、「植物病害の診断一野外採集・標本作製・プレパラート作製・検鏡および病原菌の分離・培養・接種・同定」(講師 原田幸雄・田中和明)の内容で実施した。「*Rhizoctonia* の分類と同定」の担当予定であった生越明先生はプログラム直前に入院され、ご参加いただけなかったのは残念であった。期間中は朝9時30分から午後5時過ぎまで昼休み以外はほとんど休憩なしで、皆さん熱心に受講されていた。参加者のほとんどは、現在、植物病理関係の仕事に携わっている方であるが、受講希望理由を見ると「私は大学時代に植物病理学を専攻しておりませんでした」、「学生時代も植物病理学を専攻しておりましたが、病害診断や、病原体の単離・同定など基本的な技術を持たないままです」、「これまで「分子レベル」の内容が中心で、実際に病原菌を用いた研究・フィールドワーク等にはほとんど縁が無いまま今日にいたりしました」、「大学では、主にシロイヌナズナを用いてDNAを扱う研究をしていました。昨年の4月から診断に携わる仕事も担当しているのですが、病理に関しては大学の講義で勉強した程度のものであり、図鑑を調べ顕微鏡を覗いて四苦八苦することが多いです」、

「肝心の病理学の知識に欠けており、何から考えればいいのかもわからず苦勞する場面が多々あります」など、教育プログラムの重要性が浮き彫りになっている。

今年の夏は盛岡も例年のない猛暑で、冷房設備のない学生実験室での実習は大変ではないかと心配していたが、開催期間までには気温がほぼ平年並に戻り、それほど大きな支障はなかったようである。1日目の夜は講師の先生を囲んで懇親会を開催した。初日であったためか、参加者の皆さんはやや堅くなっていたように感じたが、4日目の夜に開いた懇親会ではかなり盛り上がり、2次会でも遅くまで楽しんだようである。盛岡には3大麺(冷麺、じゃじゃ麺、わんこそば)というのがあるが、参加者のある方はこれら全てを食したそうである。最終日の実習終了後には、学会本部から送られた教育プログラム修了証書を授与して、参加者全員で記念撮影をした後、全プログラムを終了した。終了後のアンケートでは「植物病原菌の分離・同定に関する基本的な技術や知識をその分野の第一人者から学ぶことができたのは大変良かった」、「何より先生方、受講生の方々と討議でき、そこから様々な知識が得られた点が良かった」、「先生方に熱のこもった講義やご指導を頂き、とても嬉しかった」など、今回のプログラムには概ね満足されたようであった。一方、「フィールドを含めた研修もあればよい」、「盛りだくさんの内容で、できない部分もあった」、



「待ち時間の有効利用が必要」、「開始時間をもっと早めてもよい」などの意見もあり、今後には活かさればと思う。

なお、今回の教育プログラムの実施に当たっては、生井恒雄氏、本蔵良三氏、高橋英樹氏、古屋廣光氏、佐野輝男氏の皆さんに実行委員としてご尽力いただいた。講師を快くお引き受けいただいた先生方、実験助手を努めていただいた方々も含めて改めて感謝申し上げます。（吉川信幸）

(2) 第1回植物病害診断研究会

第1回植物病害診断研究会は、平成19年9月15日（土）に東京大学農学部弥生講堂一条ホールで開催された。事前登録の申込は北海道から沖縄まで全国各地に及び、当日も260名を超える参加者で会場は熱気にあふれ大変に盛況であった。冒頭に発起人代表の一人である難波が、本研究会設立の趣旨について説明した。ついで「植物病害診断の意義と今後の連携に向けて」と題して東京大学堀江博道氏より基調講演が行われ、現場における病害診断の重要性と、現場をつなぐ診断ネットワークの構築が今後必要となることなどが指摘された。基調講演に引き続き第1セッションとして、「ジャガイモのウイルス病を見極める—遺伝子診断と病徴観察のはざま—」（北海道農業研究センター眞岡哲夫氏）、「病原細菌の見分け方のいろいろ」（農業生物資源研究所澤田宏之氏）、「遺伝子解析による菌類分類学と形態分類との関係」（三重大学高松進氏）と、植物の病原3種についてそれぞれの診断に関する最新知見について紹介があった。次いで第2セッションでは、病害診断の新手法のトピックスに関する紹介があった。今回は「LAMP法」について愛知県農業総合試験場福田至朗氏から、「土壌診断用バイオセンサー『Soil Dock』」についてサカタのタネ橋本好弘氏から講演いただき、新手法の詳細とその利点、あるいは今後の問題点など興味深い講演で、会場からの質問が相次いだ。第3セッションでは、「診断の困難な病害に出会ったとき、その解決方法の事例」として長野県野菜花き試験場藤永真史氏、茨城県農業総合センター農業研究所渡邊健氏、東京都農林総合研究センター竹内純氏から各県の事例紹介をいただき、その後パネルディスカッションを行い活発な議論がなされた。各県の現場で働いておられる方々のお話は、身近かつ切実な問題も多く、会場は度々どよめきと爆笑の渦に包まれた。パネルディスカッションでは、異常な熱気と共に盛り上がり、座長も困るほど会場からの発言が相次ぎ、今後はこのセッションにももっと多くの時間を割く必要があると感じた次第である。最後に、発起人代表の一人である中央農業総合研究センターの高橋賢司氏から「これからの病害診断研究会のあ

り方について」総括と今後に向けたビジョンについてお話しがあった。第2回の当研究会は来年、神戸大学を中心に開催される予定であることが紹介され、開催地担当で幹事でもある土佐幸雄氏より挨拶があった。最後に当日遠路はるばる駆けつけてくださった露無慎二学会副会長より講評を頂いた。大変活発な研究会となり、病害診断研究に対するニーズの大きさを改めて認識することとなった。また、今回は学生の参加が2割弱であったが、若い世代がもっと多く参加することを望む。今回は初回であり、どの程度参加者が集まるか雲をつかむような状況であり、学会事務局、眞山滋志会長、東京大学植物医科学研、病理研の学生・スタッフ諸氏の協力によって無事終了することが出来た。ここに深く感謝申し上げます次第である。（難波成任）

(3) 第43回植物感染生理談話会

平成19年度の植物感染生理談話会は8月9日（木）～11日（土）京都府立大学、大学会館にて開催された。参加者数は大学関係95名（教員36名、学生・ポスドク59名）、法人・企業研究所20名の計115名であった。本年度は「植物-病原微生物の相互作用のダイナミズム」をテーマとし、細胞間コミュニケーションのダイナミズムと遺伝的多様性と変異のダイナミズムの2つの観点から最先端の成果を紹介頂いた。講師の先生と演題を以下に示す。蔡晃植氏「イネのフラジェリン認識によって誘導される過敏細胞死の機構解析」、渋谷直人氏「PAMPs/MAMPs認識と防御応答シグナル伝達の分子機構」、光原一朗氏「過敏細胞死の情報伝達と防御応答」、川崎努氏「Gタンパク質を介した病原体認識シグナルの伝達」、吉岡博文氏「植物免疫におけるラジカルバーストの分子機構」、寺内良平氏「イネ-いもち病菌相互作用の解析」、木場章範氏「植物病原細菌の感染を制御する宿主応答機構～*Ralstonia solanacearum*-*Nicotiana* 属植物相互作用の解析～」、荒瀬栄氏「トリプトタミン経路を介したイネの抵抗性発現機構」、朴杓允氏「病害ストレスに対する宿主の細胞応答に関する電子顕微鏡解析」、高野義孝氏「ウリ類炭疽病菌の感染戦略に必要な代謝機能」、篠原信氏「細菌細胞間情報伝達システム（クオラム・センシング）と病原細菌の動態について」、石橋和大氏「トマト *Tm-1* 遺伝子によるトマトモザイクウイルス増殖抑制機構の解析」、大村敏博氏「イネ萎縮ウイルスがコードする12種タンパク質の感染細胞内での動態とウイルス複製」、土佐幸雄氏「いもち病菌非病原力遺伝子の変異と彷徨」、上田一郎氏「クローバー葉脈黄化ウイルスの病原性」、露無慎二氏「非病原力遺伝子の圃場における安定性決定要因について：病害抵抗性育

種の一戦略」, 白石友紀氏「今, 感染生理学は何を明らかにすべきか? 路傍から見て」, さらに特別講演として京都府立大学人間環境学部の椎名 隆教授に「植物の細胞シグナル伝達における葉緑体の役割の再評価」と題して講演を頂いた。また, 学生を中心としたポスター発表は33題の応募があり, 意欲的な発表と意見交換が行われた。ポスター発表では優れたポスター発表3題に対して談話会幹事の投票によりベストポスター賞が選出された。また, 来年度の談話会はつくば・茨城地区が担当して開催されることが了承された。

(久保康之)

2. 部会開催報告

(1) 東北部会

平成19年度東北部会は9月20日, 21日の両日にわたり, 秋田県立大学秋田キャンパスを会場に, 約70名の参加で開催された。開催地幹事 古屋廣光氏を中心に, 関係各氏のご協力により, 部会運営は極めてスムーズに進行し, 活発な質疑応答が行われた。講演数は26題で, 内訳はウイルス・ウイロイド病12題, 糸状菌病9題, 細菌その他2題, 生物防除関係3題であった。20日の講演終了後には藤 晋一氏の案内で, 秋田県立大学バイオテクノロジーセンターを見学し, 続いて秋田市内に場所を移し懇親会が盛大に行われた。

東北部会では昨年度の総会において, 東北農業の発展に貢献した部会会員を表彰する目的で, 東北部会「地域貢献賞」を設立した。本年4月から部会長および幹事を中心に選考を進め, 20日に開催された幹事会において最終候補者3名につき業績概要説明および投票を行い, 平成19年度(第1回)「地域貢献賞」は, 青森県農林総合研究センター桑田博隆氏の「主産地形成に伴う新発生・特異発生病害に関する病原学および防除方法の研究」に決定した。21日の総会において賞状および記念品の授与を行った。

東北地区が担当する平成21年度日本植物病理学会大会の開催地について幹事会で検討した結果, 大会委員長が生井恒雄氏, 開催地は山形県と内定した。大会プログラムの編成などは部会全体で担当することとした。平成20年度の東北部会長選挙の結果, 次期部会長には吉川信幸が再任された。また, 平成20年度の部会開催は, 岩手大学(開催地幹事 磯貝雅道氏)が担当することが承認された。

(吉川信幸)

【関連国際会議開催状況】

(1) 第3回アジア植物病理学会議報告

2007年8月20日~24日まで, 「経済のグローバル化が急速に進むアジアにおける植物病理学の役割」を主テーマにインドネシア, ジョクジャカルタ市のガジャマダ大学で開催された。インドネシア植物病理学会とガジャマダ大学農学部植物保護学部が組織した本会議には, 19カ国から約200名が参加し, 半分は諸外国からの参加者で, およそ20人が日本から参加された。

開会式に続く基調講演では, グローバル化経済に対するインドネシアの政策や同国における植物病理学の現状が紹介された。また, 日本植物病理学会の眞山会長が「植物病理学のミッションとアジア植物病理学会」と題して講演された。

会議は, 植物-病原体相互作用, 菌類病, 細菌病, ウイルス病, 線虫病, 森林病害, 貯蔵病害, 生物防除, 伝染病学, 発生予察, 病害抵抗性, IPMなど, 合計12のテクニカルセッションに分かれていた。発表課題数は最終的には招待を含む講演が97題, ポスターが38題であり, 出席のキャンセルが目立った。このため, ガジャマダ大学の関係者, 学生ほかの懸命の運営努力にもかかわらず, 内容的には必ずしも十分とはいえなかった。しかし, 中国や韓国などの学会とも一緒になって, 今後アジア地域における植物病理学を発展させ, 農業における問題の解決を図って行く上で, 本会議は欠かせない。その意味で, この会議をまだ一度も日本で開催していない, 我が植物病理学会と会員各位のより積極的な関与が重要であると感じた。

折しも酷暑の日本から渡航してみると, 赤道に近いはずのジョクジャカルタ市は, 意外にも朝夕など却って凌ぎやすかった。会議終了後, 参加者の一部はいくつかのグループに分かれて現地を視察することができた。ヤシやバナナを背景にして, キュウリのべと病などを見ることは日本国内では経験できず, 興味深いものであった。また, ディナーパーティーなどでは, インドネシアのみならず各国の人達と大いに交流を深めることができ, 楽しいものであった。なお, 次回の会議は2011年にオーストラリアのダーウィン市にて開催される予定である。

(石井英夫)

(2) 第3回 AASPP (Asian Association of Society for Plant Pathology, アジア植物病理学会連合) 評議員会について

上記第3回ACPP(アジア植物病理学会)開催初日に, シンガポール大学Wong会長を議長とした第2期AASPP評議員および現ISPP(国際植物病理学会)役員参加のもと,

評議員会が開催された。最初に、開催委員長 Susamoto 氏より ACP 開催準備状況・参加状況について説明があり、会長からそのご苦勞に謝辞があった。議事としては、次期開催地についてのプレゼンテーションがあり、投票の結果、オーストラリア・ダーウインに決定された。また、第3期の AASPP 評議員会の新役員として、会長に Susamoto 氏、副会長に、開催国オーストラリアから Guest 氏と小生の2人、経理に、韓国代表 Park 氏、幹事長に中国代表 Han 氏が推薦され、原案通り認められた。なお、事務局は、China Agricultural University 内、中国植物病理学会事務局に置くことが提案されたが、2期までという期限付きで認められた。この他、AASPP 内に分野別小組織をつくるとの提案があったが、種々討議した結果、現在の AASPP の経済基盤等を考えると、時期尚早ということとなった。その他、AASPP の journal 発刊、参加国数の増加や、予算の基盤と管理等について、多数の意見が出されたが、結論を出すには至らなかった。(露無慎二)

【新刊書】

大阪府立大学の 大木 理先生が学部学生用の教科書として「植物病理学」を東京化学同人より上梓されました。(B5 2 色刷, 174 pp, 定価: 2625 円 (税込み); ISBN: 978-4-8079-0660-4, 発行年月日: 2007 年 10 月 10 日)
(寺岡 徹)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、

書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いいたします。

投稿宛先: 〒 170-8484 東京都豊島区駒込 1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

Fax: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ:

加来久敏, 石井英夫, 寺岡 徹, 竹内妙子, 小坂橋基夫,
各委員宛

編集後記

学会ニュース第 40 号をお送りします。本号では教育プログラム、部会開催報告など学会活動の報告を中心に掲載させていただきました。中でも第 1 回植物病害診断研究会は 260 名を超える参加者で盛会裏に終わり、研究会設立に尽力された難波先生はじめ関係者の方々に厚くお礼申し上げます。教育プログラム、病害診断研究会などの盛況は、急速に発展する科学としての植物病理学と診断など実学としての植物病理学の乖離という、学会が直面する大きな問題が背景にあります。また、アジア植物病理学会の報告にも学会の国際化、とくにアジア地域における貢献など本学会のもう一つの大きな問題が含まれています。このように多くの問題を抱えてはいますが、本号でも活発な学会活動が目白押しで、主催者の皆様方のご尽力に心から感謝申し上げます。(加来久敏)
